あとがき

本論集の「序――日常のディアスポラ」では、地球規模に広がるパンデミックの状況下で私たちが「ディアスポラの原野」に放り出されているということが述べられていた。少しずつ状況が回復してきたとはいえ、いまだに私たちは、山口が書いているように、他者に触れること、そして他者に触れられるという日常の貴い経験を奪われている。そのような状況で私たちの多くは他者や周りの世界とのつながりを失い、「ディアスポラ」となっている。「故郷」から引き離され、希望のなさや不安が広がる「原野」と化した日常の中で彷徨いつづけているのだ。このことは、言い換えると、私たちが日常の不確かさを感じながら生きているということでもある。

日常の不確かさの感覚は、自分が「今」、「ここ」に存在していることの確証、日々、実際に生きているということの確証が得られないということにつながる。たとえば、大学でのオンライン授業で発表する学生は、「今」、「ここ」で一生懸命、話しているにもかかわらず、その自分の姿を他の学生が見ていること、そして自分の声を彼らが聞いていることを確認することができない。対面授業で感じる他者によって見られ、聞かれることから生まれるリアリティを感じることがない。自分という存在は、他者や周りの存在との関係において成立するものである以上、自分の存在自体のみならず世界と人びとのリアリティも不確かであると感じることとなる。このような「今」、「ここ」を生きる自分や世界の存在の不確かさと、長引くパンデミック、終結の兆しのないウクライナでの戦争、地球に甚大な被害を及ぼす気候変動などのさまざまなカタストロフィがもたらす先の見えない不安が相まって、私たちにとってますます日常が不確かなものとなっていく。

不確かな日常の経験において、私たちが求めているものとは何であろうか。それは実際に「今」、「ここ」に生きているということの確かさなのではないだろうか。それは「ディアスポラ」となっている私たちから奪われている「故郷」であるとも言える。

しかしながら、同時に目を向けたいのは、日常には常にすでに、ある種の確かさの感覚がひそんでいるということである。日々の生活を、どこか離れたところから眺めるのではなく、実際に生きること。その最も平凡な普通の生活には、具体性にもとづく確かさがある。たとえば、犬をつれて朝の散歩をする。まわりの木々や花々の小さな変化に気づく。いつものこの椅子にすわり、いつものこのカップでコーヒーを飲む。五感のはたらきや身体的感覚を伴う行為を通して、私たちは自分が「今」、「ここ」に存在していることを感じ、「今」、「ここ」の具体性に触れ、この世界を感受する。日常生活を実際に生きることのうちには、「今」、「ここ」の確かさの感覚がある。

日常を文化という観点から考えると、文化は、そのような日常のうちにある確かさを私たちが再確認することを可能にする力をもっている。それは、文化が、わかりやすい仕方であれそうでない仕方であれ、日々の生活を実際に生きるという具体的な経験にもとづくものであり、その経験の共有、すなわち、「今」、「ここ」の共有に関わるからだと考えられる。文化とは、私たちが生きている「今」、「ここ」が、具体的な「かたち」をもって現れる次元であり、また、その日常の「かたち」の共有が起こる次元であると言えるだろう。

本論集に収められている一六の章は、アプローチは異なるが、どの章も文化が日常の共有に関わることを示している。一章（齋藤）、七章（長谷部）、一四章（五十嵐）はそれぞれ、文化における日常の共有について、日々の生活実践に重きをおきながら論じている。齋藤は、日常生活における美的好みや判断が、いかに私たちが住む世界の創出に関わっているかを具体例とともに説明している。彼女によると、私たちの美的好みや判断は、知らず知らずのうちに日常の美の支配的な理想像（たとえば、マイホームの理想的な芝生、均一にそろった野菜や果物の形）から影響を受けており、そのような美的好みや判

断にもとづいて環境や社会が創られている。しかし、教育、芸術、社会運動などを通して、現存の美的パラダイムに転換をもたらすことも可能である。最後に強調されているのは、他人やものへの「思いやり」にもとづく美的好みや判断のあり方、さらには行動がよりよい社会と持続可能な世界を創出することに結びつくという点である。ここで提唱される美的実践のあり方は、日常の生活実践において「思いやり」の共有が生じ、それが世界の創出に関わることを示している。一九世紀後半ヴィクトリア朝イギリスの交霊会について考察した長谷部の章では、日常は交霊会が行われた家庭のドローイングルームを通して理解されている。その日常空間では、心霊現象の共有のみならず、内／外、聖／俗、日常／非日常の境界の揺らぎの共有が起きる。五十嵐の章では、現代社会における食の問題、それに関わる倫理の問題が扱われる。特にここでは、「何を食べるか」を選ぶ能力と余裕をもつ富裕層の人びとの食文化において、「正しい食」、「倫理的な食」の追求という日常的な実践が共有されていること、そして、それが社会的分断と閉塞感を生んでいることが問題化されている。このような食文化のあり方への批判的視点は、私たちの日常の生活実践における「正しさ」、「倫理」を考え直すきっかけを与えてくれる。

他の章では、考察の対象として文化的表象（絵画、彫刻、建築、庭園デザイン、文学、映画など）が取り上げられており、そのような表象を通して日常の共有が起こることが示唆されている。明確な形で日常の共有が論じられているのは、一〇章（中田）と一三章（青柳）である。中田の章はいかに労働者階級の日常が、一九世紀イギリスの女工エレン・ジョンストンの工場詩を媒介に、共有されていたかについて論じている。ここでは、詩を創作する一人の詩人とそれを鑑賞する一人の読者のあいだでおこる詩の共有とは異なる、共同体による共有を前提とした詩の創作が（労働に占有されると思われがちな）労働者階級の日常のうちに存在していたことが指摘される。私たちはこの章から、日常が芸術作品を媒介に共同体において共有されるものであるという視点を受け取ることができる。青柳の章はアルジェリアの日本式マンガ創作活動の考察を通して、類似した視点を提示している。青柳は、このマンガ創作表現を共有する市民的共同体の文化活動のうちに、自分たちの日常を価値づけ、それを共有し、自分たちの社会の希望のありかを見出そうとする動き、そして、国民共生意識を醸成していこうとする動きがあることを指摘している。その動きは、行き詰まりや矛盾を抱える社会を内側から変えていく力へとつなが

る。ここでは、日常の表象を共有することがみずからの文化を肯定することと密接に結びついていることが示される。これら二つの章以外の章でも、多様な視点から、文化的表象を媒介にした日常の共有に焦点があてられている。五章（半田）では、私たちが日々、生きている社会に存在する建築物の意味が「適応再利用（adaptive reuse）」によって流動的に変化していくことが語られているが、そのような変化を社会の人びとは共有する。これは八章（竹谷）が指摘する「家」の意味の「反転」（生存のための環境としての家から、空襲の実験対象物としての家への反転）に接続しうる視点である。また、文化的表象の内部で描写される日常の共有に着目する章もある。ヘンリー・ジェイムズの『ポイントンの蒐集品』を分析する六章（三宅）では、この小説が描いている室内装飾に対する審美的趣味の共有と人間関係の問題が取り上げられている。一五章（イ）では『愛の不時着』という映画作品における、女性主人公と敵側の男性が食べ物を分かち合うシーンとそれがもつ意義が検討される。また一六章（パスコー）は、『嵐が丘』の和訳において大幅な内容の書き換えが施された例として、原作にはない、ヒースクリフとキャサリンが食事を共にするシーンの描写について考察している。

その他の章も、扱っている文化的表象のジャンルや関連する時代・地域などに相違はあるが、日常に関わる想像やイメージを迂回することにより、日常の共有が起こることを示唆している。このような文化的表象を媒介とした日常の共有は、私たちが生きているという事実にある種の基盤を与えてくれる。たとえば、私たちが文学作品を読むことや映画を見ることを通して、そこに描かれている日常を共有する経験は、「今」、「ここ」に生きている自分の存在を再確認することにつながる。もし日常についての文化的表象になんらかの役割があるとすれば、それは、「今」、「ここ」の確かさを私たちが再確認すること、そして日常のなかに確かさを取り戻すことを可能にすることであるかもしれない。

このように、本論集は、実際に私たち人間が生きるという事実、すなわち日常生活の事実に立ち戻り、文化についての考察を進めようとしたものである。それは、単にこの事実を外から眺め、概念的あるいは抽象的に議論したものではなく、日々の生活を実際に生きるという具体的な経験や、「今」、「ここ」の具体性を映した文化的イメージから、美、建築・家、文学、食について探究しようとしたものである。

日常とは「今」、「ここ」の確かさと不確かさのあいだ、あるいは二つの交替のうちにあると言えるのかもしれない。創出と破壊、永続と消散、固定と流動、安堵と不安。これらの交替が日常そのものの事実なのだろう。日常において「今」、「ここ」の確かさを感じることは、その不確かさを感じることと共にある。また、それは「今」、「ここ」にしがみつくことではない。「ここ」である「今」、「今」である「ここ」で呼吸していることを感じること。時に日常を破壊する出来事を経験するときに私たちに現れてくることもある「今」、「ここ」の具体性に触れ、眼を澄ますことである。

最後に、二〇一八年春の齋藤百合子氏の講演をきっかけに企画された本論集のプロジェクトに学内外、国外から参加してくださり、素晴らしい論考を寄稿してくださった執筆者の方々、さらに翻訳者の方々に深く御礼申し上げる。特に、中田元子氏、竹谷悦子氏からは、本論集の企画段階からさまざまな面で多大なご協力を賜った。「日常と文化」というテーマについて執筆者の方々と共同で研究することは、文化や知の営みの根底には、常に日常生活に根ざした人びとの経験があること、そのような日常の経験から人文知を打ち立てる必要があることを再確認する大変貴重な機会となった。心から感謝の意を表したい。また、筑波大学出版会運営委員会の方々には、本書の提案を検討し、出版企画として承認していただいたことに感謝申し上げる。特に、ご多忙の中、本書の原稿のご確認と貴重なご助言をくださった査読者の方々に厚く御礼申し上げる。

（二〇二二年七月　対馬美千子）